

たけだ しゅんすけ
武田 俊輔氏（法政大学社会学部教授）

略歴

1974 年 5 月 11 日生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野博士課程単位取得満期退学。博士（社会学）。滋賀県立大学人間文化学部講師・准教授を経て、2020 年より現職。

研究分野：社会学（文化社会学・地域社会学・都市社会学・メディア論）

『コモンズとしての都市祭礼—長浜曳山祭の都市社会学』（新曜社、2019 年）

要旨

本書は滋賀県長浜市の長浜曳山祭という都市祭礼を手がかりとして、城下町・商家町として近世以来の地縁組織である「町内」を継承してきた地方都市の社会構造を描き出した研究である。「町内」内部の家や世代間、「町内」社会間の関係性、さらに「町内」を構成する人々の社会的ネットワークや、「町内」社会と行政・経済団体との関係性を描き出すことを通じて、現代のそうした都市の社会構造とそれを支える人びとの社会意識を明らかにする。

戦後日本の都市社会学においてこうした都市をめぐる理論構築は不十分であった。それは都市社会学という分野が、戦後の都市化と人口の流動化を背景に、近代的な市民意識に基づく人々の新たな連帯の可能性を示すという問題意識から出発し、近世以来の共同性はやがて変質・消失するものとしかみなしてこなかったためである。しかし現代においても上記のような地方都市では、伝統的な地縁組織は変容しつつも脈々と受け継がれている。

ここではそうした戦後の都市社会学の展開の中で忘却されてきた、有賀喜左衛門と中野卓の都市社会学の可能性に注目する。年中行事や冠婚葬祭といった中に現れる先祖代々の「家」同士の関係性とその変容を通して、都市の社会構造を描き出そうとした彼らの視角を批判的に継承・刷新し、「もうひとつの都市社会学」を切り開くのが本書の目的である。本書では祭礼を、「家」によって構成される近世以来の地縁組織である「町内」から人手、山車、金銭・技能といった資源を調達し、それを用いて人々に「家」や「町内」の威信、興味、観光資源や文化財としての価値といった用益をもたらすしくみ＝コモンズとみなし、その分析を通して都市の社会関係を描き出す。

祭礼は「町内」を単位として、複数の「町内」がそれぞれの経済力・文化力を競い合う形で行われる。祭礼においては、役職の配分や伝統のあり方をめぐる自己主張を通して、各「家」や「町内」は地域社会における高い威信を獲得しようとする。特に昔から長浜に住み、何世代にもわたって祭礼に資源を投入してきた「家」はその資源に見合う威信を獲得できることを期待する。しかし威信を得られるのは一部の「家」「町内」に限られるため、「家」「町内」間には激しいコンフリクトが発生する。こうしたコンフリクトはコミュニティの崩壊につながるように見えるかもしれないが、むしろコンフリクトを通して祭礼の興味（面白さ）

という用益が生みだされ、担い手や見物人全てがそれを楽しむことができる。さらにコンフリクトの結果、威信を得られなかった家や町内は、将来の祭礼においてそれを何とかして挽回すべく、次回以降の祭礼に期待する。むしろ名誉・威信の配分が全ての家にとって満たされるわけではないからこそ興味の生産・配分が可能となり、また将来いつか名誉・威信が配分されることへの長期的な期待こそが、現在の祭礼のコミットメントを支えている。逆にもし必要な資源が不足し祭礼が継承できないとなれば、その期待は満たされなくなってしまうのだ。

したがって戦後の社会変動のなかで継承の危機に瀕するたび、「町内」の人々は何としても資源を調達すべく地方都市の内外にさまざまなネットワークを広げてきた。本書の後半では、祭礼の継承のために「町内」同士が協力し、自営業者間の結びつきを活用し、観光資源や文化財としての用益を配分しつつ、経済団体や行政、学校と連携するなかで築かれていった関係性を描いている。本書は、かくして「町内」を中心としたさまざまな社会関係が構築されていくプロセスを分析することで、戦後日本の地方都市の社会構造を明らかにしている。